

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1666号 2003年01月06日(月)

《 a happy new year to you all 》

長い長い日本の年末・年始休み。皆様いかがお過ごしでしたか。あけましておめでとうございます。

年末・年始の間の大きな経済ニュースと言えば、今週火曜日に発表されるブッシュの経済政策の骨格が決まったこと、ニューヨークの株価が年明け2日の取引でダウ、Nasdaqとも3%を越える大幅な上昇になったこと、などでしょうか。ブッシュ新経済政策の骨子は、1) 議会が2001年に承認した減税の前倒し実施 2) 配当に関わる税の引き下げ 3) 企業の設備投資促進のための税制措置 4) 財政が行き詰まった州に対する援助 5) 失業給付の拡充 など。

こうしたブッシュ政策に関しては、民主党で次の大統領選挙を狙うジョン・ケリー(マサチューセッツ)、ジョン・エドワーズ(ノースカロライナ)などなど候補者達が一齐に「金持ち優遇、一般国民や小企業無視」という批判を展開。中間選挙が終わればアメリカの政治が大統領選挙に向かうことを、改めて想起させてくれました。

しかし大統領選挙を念頭に置いて実際に政治が動き出すのは、ブッシュの計画発表を受けた後であり、さらに言えば対イラクの軍事方針が具体化してからでしょう。今の見方では、アメリカの対イラク軍事行動が行われるのは2月中旬との見方が強い。

政治よりも先に動いたのはマーケットです。1月2日。ダウは265.89ドル、3.2%も上昇。またNasdaqは49.34ポイント、3.7%も急上昇した。その背景は年末に発表されたISM(the Institute for Supply Management)の12月景況指数が54.7へと11月の49.2から大幅に上昇したこと。これで、2003年への米景気に対する楽観的見方が強まった。これにより、年末に118円台まで落ちていたドルの対円相場は、120円近辺まで戻った。

今年はこのレベルからのスタートです。しかし、もう2003年の予想は昨年末に紹介しましたので、今回の年初最初のレポートは昨年末に行った韓国の現状をкаいつまんで紹介しましょう。必ずしも経済ばかりに関係している文章ではないのですが、今後いっそう重要になる朝鮮半島の状態を読者が整理するのに役立てばと思います。

筆者が韓国に行くのは、むろん初めてではありません。しかし今回のソウル訪問(12月29~31日)には明確な目標を設定しました。

1. 韓国のネット環境の実情把握
2. 特に韓国の政治におけるネットの役割
3. 盧武鉉氏と李会昌氏のネット活用法の違い(その結果)
4. 鄭夢準(チョン・モンジュン)さんが投票日前日に盧武鉉支持を取り消した後のネットでの交信内容とその変化
5. 選挙日当日のネットでの情報交換の様相
6. ネットを巡る政治的規制の状況

ソウル滞在中ほぼずっと私に付き合ってくれたのは、かねてからの友人・姜澈熙さん(大宇証券の東京事務所長として長く東京に駐在)の息子さんの信榮(シンヨン)君、25歳、大学生。韓国では徴兵制(26ヶ月)があるので、彼は留年している訳ではない。再来年卒業で、「そろそろ就職のことを考えている」ということでした。それでは、筆者が休みの間にサイト(<http://www.ycaster.com/>)にまとめ、URLで言えばこのサイト(<http://www.ycaster.com/chat/korea2002.html>)に掲載した文章とお付き合いください。

《 election through net and broadband 》

お父さんが忙しいという事情もあるが、実は行く前に姜さんに、まだ会ったことはないが当然日本語が出来るであろう(姜さんは家族を連れて日本に長く駐在していた)息子さんに「ガイドをお願いできないか」と頼んだのです。姜さんも、信榮君も気持ちよくokしてくれた。なぜ若い人に拘ったかと言うと、今回の大統領選挙で盧武鉉を大統領にしたのは若者達の熱意だと聞いていたからだ。若者の意見を聞かなければ、彼らと一緒に行動してみなければ、訪問の意味はない。2002年末のソウル訪問は徹底的に「韓国の若者」に拘った三日間だった。

信榮君や彼の友達と一緒に、時代の大部分は漢川が南限と言われたソウルの街を大きく変貌させた川の南の大商店街とデパートやシネマコンプレックスがある Coex Mall、住宅街の中のPC房、ソウルの秋葉原と言われる街、ミョンドンを歩き、加えて韓国の若手新聞記者や経営者の方々との意見交換することに時間を費やした。韓国は正月が旧正月の国で、年末・年始という考え方がない。欧米と同じで1月1日だけがお休みであとは通常通りというのが、私には都合が良かった。実際のところ、31日も街は通常通り稼働していた。

日本でもそうだが、今回の韓国大統領選挙は世界的に「ネット選挙だった」とよく報じられる。しかし、ネットが普及しているのは韓国だけではない。アメリカだって日本だってそうだ。ブッシュがゴアを破った大統領選挙だって、ただ単に「ネットが繋がっている社会での選挙」という意味なら、「ネット選挙」になりえた筈だ。しかし、にもかかわらず今回の韓国の大統領選挙がことさら「ネット選挙」と言われるのは何故か。

信榮君とノサモ運動に参加していた彼の友人とソウル市内の PC 房で 1 時間以上に渡ってノサモの HP をじっくり見させてもらった。私はハングルが読めないので、隣にノサモ経験者の同級生（信榮君と同じ年）に解説してもらいながら。彼は日本にも住んでいたことがあって、それがまた私の住んでいる高円寺だったということで笑ってしまったのだが、今はサンフランシスコを主な活動拠点にしている。彼とは英語で会話した。この文章を読んでいる方が、目の前に二台のコンピューターがあったら、片方でノサモの HP（<http://nosamo.org/>）を開きながら見て欲しい。

2003 年初めの執筆時点では新年の挨拶とか、献金募集ページとか副次的なページがいくつか出てくるが、それをどけて本来のページに戻ると、上の方にラジオとテレビのサイトへのリンクが見える。ラジオは <http://www.radiroh.com/>、テレビは <http://www.tvroh.com/mov/mov.asp> が URL なのだが、これをチェックしてはっきりと「これはブロードバンドだから出来るのだ」ということに気がついた。つまり、このテレビサイトの画像を見ていると、実にスムーズなのだ。筆者の東京の家は実は光ファイバーで実質 48 メガが出るからスムーズなのだが、日本の普通の ISDN 回線ではこの画像のスムーズさは出ない。

韓国は世界に名だたるブロードバンド大国である。実際的には ADSL の世界で、信榮君の家も 8 メガが 12 メガで繋がっているという。バッファリング（画像、音などのデータのサーバーからの取り込み）の時間もブロードバンドでは短い。サイトを進んでいくと、盧武鉉を応援した二人の俳優の 1 時間以上に渡る演説にまずぶちあたった。これが、実に鮮明にストリーミングで見れるようになっている。日本の政治家、政党のサイトで 20 分以上の動画を見たことはない。しかも、大容量の転送を必要とする音声、動画ファイルがふんだんに使われている。「へえ、これがノサモの HP なのか」と。なぜなら、政治的サイトの域を超えている部分がある。多様で、本数としても多い音声、動画が埋め込まれている。加えて、韓国の若者が「フラッシュ」と呼んでいた一種のアニメもふんだんに取り入れられている。これがまた実に面白い。大部分は支持者が自発的に作って、サイトに献上したものだという。

ノサモの HP は投票日まで 2 週間くらいの間、閉鎖されていた。韓国では政治的サイトは選挙の間は政党しか運営できないという法律があるそうで、「盧武鉉を愛する人々の集い」としてのノサモは政党ではないという理由で、一定期間サイトは閉鎖されたのだという。しかし、サイト運営者の主役二人がノサモから千年民主党（盧武鉉を候補として）に入って民主党のサイトを運営したので、実際には組織としてのノサモはずっと選挙中も活動していたことになる。

繰り返すが、重要なのはノサモのサイトが日本の政党や政治家の辛気くさい政治サイトというよりは、非常に幅の広い、遊びあり、映像あり、漫画ありで、政治に関心のない人々のニーズにも合うサイトになっている、という点だ。これなら、女子高生でも関心を持つ。これが多くの人の関心を集めて、アクセス数の増加につながった。そのアクセス数が政治的

力となり、献金の増大に繋がったと思われる。

映像、音声とも非常に多様だったし、これはネットの特徴なのだが更新が楽だから常に最新のニュースがアップされ、いつ見ても飽きないシステムになっている。それを可能にしたのは、韓国が突き進んだ「ブロードバンド社会」というわけだ。インフラとして送り手と受け手の使っているシステムレベルが高い水準で一致しなければ、システムが持つ機能（テレビ、ラジオ、アニメなど）を十分に楽しめない。日本やアメリカはネット利用者のアクセススピードがまだ全般に遅く、ネットテレビを楽しく見れるレベルに届いていない。

つまり結論はこうだ。日本でも政治的規制が緩和され、そして社会全体のインフラとしてのブロードバンド社会が普及すれば、「思わぬ政党だったり、思わぬ政治家が出てくる」可能性が高いということである。今の日本における政党の辛気くさいサイトでは人は集められない。音、映像、コミック、アニメ、書き込みなどなどを多彩に使って、女子高生でもアクセスしようと思うようなサイトがブロードバンド時代には俄然注目を浴びる可能性があるし、アクセス数そのものが力となる可能性が強い。

なぜそう言い切れるのかということ、これは今回多くの人がそう言っていたし、実際に選挙前の記事を読み直して見るとわかるのだが、盧武鉉というのはほとんど人々から半年前には本気には扱われていない候補だった。韓国の誰もが実は驚いているのではないか。それが本当に大統領になった。おそらく、既存のメディアに本気で扱われなかった彼が大統領になるにあたって一番力があつたのは、ネットとそれを動かした若者の熱意だっただろう。

強調しておかねばならないのは、ノサモ（選挙運動中は民主党）のHPにとって最大のコンテンツである盧武鉉という人そのものが、非常に面白い、語ることの多い人だと言うことだ。何を言おうとしているのかということ、政治サイトの最大のコンテンツは政治家そのものであり、それが面白くなければどんなにサイトにお金を使っても駄目だ、ということだ。

盧武鉉がどれほど変わった人物だったかに関しては、日本でも数多く伝えられている。小学校時代の話から始まって、貧乏だったこと、頑固だったこと、独学で弁護士になったこと、韓国国会での辻元さん並みの質問で注目を集めたこと、自分の選挙区からではなく、不利な選挙区から出続けて負け続けたことなどなど。

既存のマスコミと違って、ネットの特色は情報の流布のコストが異常に安いということである。だからこそ、私はこうしたサイトを続けていられる。かつ、文章、映像、音などなど実に多様な情報のハンドリングが可能で、特にブロードバンド時代はその可能性が広がる。ということは、語るに足る、表現するに足る面白い人生を生きていたり、特徴ある顔をもった、特技のある人の方が情報横溢のネット社会では受け入れられやすい、ということである。そうじゃないと、ネット社会では書くことがなくなってしまう。テレビや印刷の世界では、ある程度の情報で紙面、画面が埋まっても、キャンパスが大きく複層的なネットの情報社会では並みの情報では足りない。盧武鉉は書くことが山ほどある、ネット社会にぴったりだった。

李会昌はエリートで、語るべきことは少ない。皆が、「あそう、でどうした」と白ける話題ばかりである。良い大学を出て、史上最年少で最高裁判事になって…。それはそれで話題だが、皆が盛り上がる話ではないのだ。おまけに息子二人は徴兵を回避している（信榮君はこれが決定的な敗因だと言っていた）。李会昌はどう考えても、誰もが参加するネット時代のコンテンツではないのだ。印刷が主流だった時代の政治家である。李会昌もネットを使わなかったわけではない。しかし、そもそも最大のコンテンツ（李会昌その人である筈だが）がおもしろみに欠けるのだし、仮に面白いページを作ったとしても67歳という年齢は若者を引きつけるには行き過ぎている。韓国でもネットを盛んにやるのはせいぜい40歳までだから、李会昌のHPはあまり見られなかっただろうし、実際に李会昌と盧武鉉のHPのアクセスカウンターはダブルスコア以上の差がついた。

ということは結論はこうだ。書くに足る、映像、音で載せるに足るコンテンツをもった人間が、ネット社会の政治家には相応しい。エリートでも、庶民でも良い。しかし、その情報を見た人、聞いた人が、「これは面白い」と思わなければダメだ。エリートにはそういう経歴は少ない。だからエリートなのだ。順調に行っている人をエリートという。ということは、今後はアピールする面白さをたくさん持った非エリートが民衆から選ばれる可能性が高く、語るに足る話題を持たない辛気くさいエリートが彼らに仕える形が先進国での政治・行政の一種のパターンになる可能性がある。

ただし、ただ面白ければ良いのか。ネット社会の特徴は、対象に対して時にすこぶる辛辣になると言うことである。スキャンダルでもあれば、一晩でネットでの評判は墜ちる。ということは、「面白いが、決定的なスキャンダルのない人」が、ネット社会で大きな政治家要件を満たすと言うことだ。

《 betrayal and 24 hours after that 》

鄭夢準(チョン・モンジュン)氏が盧武鉉支持を取り下げたのは、投票日の前日2002年12月18日の夜10時過ぎだった。盧武鉉陣営に大打撃と大部分の人は思ったし、韓国のマスコミもこれには衝撃を受けたと伝えられる。新聞の中には19日の朝刊に、「盧武鉉の陣営は、所詮こんなものだ」と書いたところもあるらしい。

盧武鉉と韓国のマスコミの大きな図式を示すと、三大新聞である「朝鮮日報」「中央日報」「東亜日報」は基本的には反盧武鉉だったそう。テレビは国営が多く、立場は曖昧。こうしたなかで、鄭夢準が支持を取り下げた後、19日の投票日にかけてネットがどのような役割を聞き取っておきたいというのがソウル訪問の大きな目的だった。新聞は一日に一回しか印刷できない。テレビもしばりがあって個人の意見や民衆の意見を無制限に載せるわけにはいかない。しかし、ネットは自由だ。

まず信榮君の友人の話。彼がノサモの運動に加わっていた人物であることは先に紹介した。

「19日の午前中はその後の出口調査結果発表でも明らかだったのだが、李会昌が勝っていた。昼頃にあるサイト（bulletin board）に「盧武鉉が李会昌に1%負けている」との書き込みがあった。この情報は、開票本部にいる誰かが流したとも言われているが不明。書き込みも誰がやったか分からない。しかし、この書き込みをきっかけに、ノサモのメンバー、特に20歳から25歳の若者を中心に「友達に連絡しよう」「投票に行き、盧武鉉に入れよう」という動きがネットを通じて広まった。ネットに書き込み、携帯電話をし、そして携帯メールを打ち合った」

ネットは眠らない。韓国の人たちはネットをする人をネチズン（日本ではこの言い方はほぼ死滅した）とよく言うが、彼らが主役だったことを証言するのは、彼だけではない。ある新聞には彼の証言を裏書きするように、「選挙の当日の昼間では李会昌が勝っていた。これは出口調査で分かっている。しかし、午後になって盧武鉉のサイトは猛烈にネットを使い始める。午後になってキャンペーンを始め、数万から数十万の人間をネットを使って瞬間的に動員した。相手のhpをダウンできるネチズンが動いたことによって、形勢は投票当日の昼から変わり始めた」という解説があった。

おそらく韓国大統領選挙におけるこの24時間の動きの全貌を知っている人はいない。なぜなら、ネットが主流になりつつあるマルチメディア時代の情報の動きは、きわめて重層的、複層的だからだ。しかし、一つだけはっきりしている。それは、この24時間（鄭夢準が盧武鉉支持を撤回してから）については、既存のマスコミはほとんど機能を失っていた、ネットに全く主役をとられているということである。既存のマスコミは、「やっぱり盧武鉉は……」とか、「鄭夢準はひどい……」とか悠長な議論を展開していたに過ぎない。

その間にネット（HP、bulletin board、メールなど）、携帯電話、携帯メールなどの新しいメディアは活発に動き、双方向のやりとりの中で意見集約し、投票意志の確認が進んだ。結果は盧武鉉再支持であり、それが選挙の結果に影響を与えたということである。つまり結論はこうだ。既存のマスコミは、その機動性、報道や主張の自由度、即時性、そして双方向性において、台頭しつつあるメディアに対して完璧に負けたということである。テレビや新聞にも双方向性はある。しかし、それはとてつもなく悠長なものであって、「24時間」といった勝負では、特に新聞は全く役立たない。ネットは瞬時、瞬時が interactive だ。

既存のメディアには、その意見に指標性がある。それは依然として生きていると思うのだが、韓国の大統領選挙では最初からそれは失われていた。小泉首相が最初に党員投票で一位を獲得したときに既存の日本の政治メディアが狼狽の中で選挙結果を見守ったのと同じ状況だ。ネットなど台頭しつつあるメディアは猥雑で、ごっちゃ煮の面がある。韓国の今回の大統領選挙でもネットが綺麗な役割だけを果たしたわけではない。酷い中傷も行き交ったと聞く。しかし、何でも、つまり産業でも、人材でも、新しく出てきたものは胡散臭いものだ。既存のマスコミも、出てきたときは皆胡散臭かった。だとしたら、ネットだけを胡散臭いと考える理由はない。

開票は19日午後7時から。開票当初は大接戦だった両候補の得票率が徐々に盧武鉉有利に傾き、李会昌の事務所から徐々に人が引き始めたのは、鄭夢準が盧武鉉支持を撤回してからちょうど24時間後の19日午後10時半くらいからだった。最終的な得票差は60万ちょっとにすぎなかった。

《 relations between North and South 》

2002年の韓国大統領選挙運動中、南の選挙の方向を変えかねない事件がいくつもあった。北朝鮮が1994年の米朝枠組み合意に基づく合意事項を覆して、核施設の封印を解き、IAEAの監視カメラを見えなくしたことなどである。日本やアメリカでは「朝鮮半島の危機の高まり」が声高に報じられ、論じられた。

しかし、選挙は太陽政策の継続を主張する盧武鉉の勝利で終わった。むろん、盧武鉉にとって有利で、李会昌に不利な事件もあった。装甲車で韓国の女子中学生二人を殺してしまった米兵に無罪判決が出て、これを契機に反米運動が強まったことだ。これは親米を掲げる李会昌の陣営には不利で、盧武鉉に有利だった。しかし、日本やアメリカから見れば北朝鮮の核を巡る挑発的動きの方が、はるかに脅威に映ったし、韓国の選挙の結果を左右する要素に見えた。しかし、今回の選挙では韓国の国民がそう考え、動いた様子はなかった。つまり、北の脅威が李会昌の支持には繋がらなかったのである。何故？

韓国の人たちから出てきたのは、「10年前だったら」とか、「いや、5年前だったら」という言葉だった。どういう事かということ、10年前、5年前なら北朝鮮が今回選挙中にとった行動が選挙の行方を変えたかもしれない、ということである。当時だったら、北の実体が見えなかった故にその行動は脅威になったはずだ、というのだ。ではなぜ今はそうならないのか。いくつかの理由がある。

1. 北の苦境（食料ない、ガソリンないなど）が伝えられるようになり、北朝鮮が競争相手と言うよりは経済的にも追いつめられた、口だけの虚勢を張る国であると、余裕を持って見れるようになった
2. 厳しい対立が残っていると伝えられているが、実際には北朝鮮と韓国の経済交流が進み、人も頻繁に行き来している中で、北を具体的な脅威と見る韓国の人々が減少している
3. 脅威としての地位が低下した北朝鮮に比べて、ソウル市内に基地を持ち、韓国人を見下したような行動を取るアメリカに敵意が集中しており、その分だけ北の脅威を軽く見る風潮がある

非常に象徴的な話を聞いたのは、31日に姜さんが知り合いの人々を集めてくれたランチョン・ミーティングの席でのある韓国の若手実業家の話だった。彼は最近38度線の展

望台に自分の二人の男の子を連れて行った。そこで彼らに聞かれた。向こうにはどういう人が住んでいるのか と。

その実業家、かつ韓国の二人の子供のお父さんは、子供達にどうしても「向こうには悪い人々が住んでいるとは言えなかった」というのです。これは重要な発言だと思う。韓国の人々の北朝鮮に対する考え方は、我々日本人やおそらくアメリカ人が考えている以上に変わってきている。金正日は別としても、北朝鮮の人々を敵とも思わないし、悪い人間とも思えなくなった。30代の記者も、「北が脅威だという考え方の人は、我々の世代にはいない」と述べた。

ソウル滞在中に読んだインターナショナル・ヘラルド・トリビューンには、面白い記事があった。アメリカがいくら北朝鮮を敵視しようが、北と南の経済関係の深化は続き、人的交流も進むだろうという記事。この記事（「North-South economic ties push on」）によれば、

- 1 . 2002年一年間の北と南の貿易高は6億ドルに達する見通しで、これは2001年を約50%上回る
- 2 . 過去5年間に平壤に訪問した韓国人は36000人に達し、北朝鮮の観光地として有名な Kungang を訪れた韓国人は50万人に達した
- 3 . 韓国資本の北朝鮮投資も活発で、特に Kaesong プロジェクト(3000の工場、10万の住宅、1100室のホテルなど)は韓国資本による最大の対北投資になる予定で、核を巡る緊張でもプロジェクトは続行している

経済関係や人的交流の深化が、北と南の間では着実に進んでいるということだ。もっと面白い話がある人から聞いた。それは、北の情報の南への流布に関して。それによると、北朝鮮の北から川を渡って行ける中国の国境地帯には数万の脱北者が居るが、彼らは北の政府から比較的罪を受けずに行き来をしている、という。なぜなら、もう北の監獄は一杯だし、数も多いために北朝鮮としても脱北者をいちいち罰せられないからだという。これは日本で伝えられている状況とかなり違う。

その結果、普及数で世界一の携帯大国である中国で入手した携帯電話を北朝鮮の人々が自国の北部に持ち込むことが、比較的容易に行われているという。電波は国境の川を越える。その結果、北の闇市の情報などは非常に正確に韓国に入ってきている。具体的に言えば、韓国からは中国に国際電話をかける形で北朝鮮の人々と連絡ができ、北朝鮮の北部・中国国境からは中国経緯で韓国に情報を流すことが可能だという。むろん違法だが、そういう形で南北間の情報の行き来は活発化している。

しかし、「それにしても」と日本人である私は思う。北をそんなになめて良いのか、金正日は脅威ではないのか、体制として認められるのか、200万人もの人が餓死していると伝えられているではないか、北の人々は今の体制下で不幸なのではないか、救ってやらな

くて良いのか、と。31日のランチオン・ミーティングでは韓国の人が9人くらい居たのですが、非常に特徴的なのはこういう点を矢継ぎ早に質問の形でぶつけると、一瞬場の空気が凍る、ということだ。お互いに顔を見合わすような、そして「この事情を知らない日本人にどう説明したら良いのか……」と思い悩んでいるような。

はっきりしているのは、若ければ若いほど韓国の人たちは北の人々を同胞、同じ民族だと考えている、ということだ。彼らには戦った記憶もない。アメリカの新聞には、「韓国の若い連中は、なぜアメリカ軍がソウルに居るか分かっていない」という記事が載っている。そうした事情は確かにある。金正日に対する姿勢も、どうも日本人やアメリカ人とは違う。好きではないし、敵意がないと言えば嘘だが、だからといって金正日を頭から否定しているようには思えない。まして北の普通の人々への気持ちとなると、韓国の人々は自分たちとは違うとは思っていない。つまり、日本人、アメリカ人よりも北を「身内」だと考えている。

彼らは言う。「脅威 脅威」と言われながら、50年間何も決定的なことは起きなかった。「だからこれからも何も起きないだろう」と。私からノドンやテポドンの話をしても、反応は鈍い。ここからが問題です。では、「統一」をどう考えているのか。韓国の人々が民族の同一を認め、それを受け入れ、そして強調したいのなら、早く北を吸収する措置を取れば良い、その方向で努力すれば良いのにと私などは思う。

しかし、私の個人的印象からすると、多くの南の人々は朝鮮半島の統一が望ましいとは考えているが、自分たちの大きな負担になる形で北が南を頼って来てほしいとは思っていない。東西ドイツの統一の時には、西ドイツが多大な負担を負った。それはよく知られている。西ドイツは世界に冠たる経済大国だった。それでも負担は大きかった。ドイツは記憶では5600万人の国が、1600万人（東ドイツ）を吸収した。

韓国は強くなっていると言っても、90年代末のIMF管理を脱したばかりである。統一となれば、増税あり、失業問題の深刻化ありと、課題は多い。つまりコストの問題なのである。本音の部分では、韓国の人々は北朝鮮に対して「騒がずに、今の体制のままで居て欲しい」と考えていると見ることができる。ましてや、韓国の人口4600万人に対して、北は2400万人もいる。吸収するのは、容易ではない。

どこにでも、本音と建て前はあある。建前では朝鮮半島は一つの国であるべきだし、民族は統一されるべきだ。しかし、実際のところは統一に伴うコストの問題から、早急な統一を望む声は今の韓国には少ない。しかし、そうはなかなか言えない。これは今の韓国が直面している大きなジレンマだろう。しばらく北にはおとなしくして欲しい韓国の人々にとって見れば、事態を揺さぶる金正日の強硬政策も、米朝対立も歓迎せざるものに映っているのだろう。私にはそう思える。

最後に若い韓国人の北朝鮮の脅威に関する言葉を引用しておこう。

「北朝鮮の韓国侵略……あるかもしれない。しかし、それは日本が韓国を、アメリカ

が韓国を侵略するのと同じくらいだと思っている……」

それほど、実際の可能性は小さいと思っているということだ。しかし、これが当たっているかどうかは、金正日に聞いてみないと分からない。

長くなりました。この続きは次号で。今週の主な予定は以下の通り。

1月6日(月)	大発会 12月新車販売台数 米12月ISM非製造業景気指数
1月7日(火)	12月マネタリーベース 米11月製造業受注
1月9日(木)	小泉首相ロシア訪問(～11日) 米11月卸売在庫 ECB理事会
1月10日(金)	11月家計調査 11月景気動向指数 12月雇用統計

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》